
Fate/ stay with murder

舞月朝影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / s t a y w i t h m u r d e r

【Nコード】

N 6 5 0 8 Y

【作者名】

舞月朝影

【あらすじ】

三年間。虚月識は『』と向き合っていた。それは無と言って無と言えず、有と言って有と言えないもの。形容するならばアカシックレコード。直訳するならば――死。三年の眠りから目覚めた虚月を待っていたのは、聖杯戦争という魔術師同士の闘いだっただ。

「僕が、今度こそ聖杯を破壊するよ――切嗣さん」

作者「原作風に設定を小出ししていくので、原作を知っている人からしたら煩わしいかも知れませんが。どうかご了承下さい。」

P r o l o g u e (前 書)

Prologue

——ここは、どこだ。

僕の声が世界に反響する。けれど、周囲には何もなく、存在するものは無かった。

虚無に支配された空間。

無。

誰もいない、何も無い世界に——ただ一人、僕はぽつんと浮かんでいた。いったいいつから僕はここにいるのだろう。なぜこんなところに来たのだろう。それよりも、いったいどうやって？

何も無い世界。そこに存在するのは、よくわからない何か。暗くて、深くて、冷たくて。それは嫌悪感を抱かせるものでありながら、どこか親しみを持てるものでもあった。

——これが、死なのか？

わからない。解らない。判らない。僕には何も判別がつかず、ただ頭の中に流れこんでくる概念だけが僕の意識をつなぎとめていた。

——これは、なんだ。

——死。人々が世界にとどまれる時間を過ぎたときに、始まる、崩壊の始まり。

崩壊の終わりは——この、虚無に辿り着いた時だけだ。

十
十

「……ここは、どこだ？」

目が覚めた。見上げた天井は真っ白だった。手を動かそうとするとズキズキと痛み、体中、痛みでまったく動かせなかった。幸いにも痛みのない眼球だけを動かして周囲を見る。

僕の隣には、看護師さんがいた。彼女は横でじっと本を読んでいた。

あの、と声をだそうとしたが喉がうまく動かない。最後に声を発したのはいつのことだったか。僕には昨日のこのように思えたが、あの虚無にいた時間が解らない以上、記憶が確かであるかどうか確信はなかった。

数十秒間、じっと見ていると目が合った。どんぐりのように丸い目を見開いて、大いに驚き、詠嘆した。

「先生、先生！ 虚月>>こづき<<くんが目を覚ましました！」

彼女は本を床に放り投げて、丁度部屋に入ってきた先生に駆け寄った。先生は彼女より驚き、看護師さんと共に僕に歩み寄り、痛いところはないか、どこが悪いところはないかと聞いてきた。

「体を動かすと、全身が痛いです」と正直に言う。医者に嘘を言っても始まらない。

「そりゃ、君は運動していなかったからねえ。筋肉が剥離しかかっているのだろう。……しかし、他に悪いところはないのかい？」

医者は自分の言葉を一旦途切れさせ、僕の全身をまじまじと見るそれから、「もしないとしたらこれは奇跡だ。三年間も眠っていた少年が目覚めて何もなかったなんて前例がない！」

医者は大喜びだった。そんな嬉々とした表情を曇らせたくはなかったが、僕はどうしても聞きたくなって尋ねざるを得なかった。

「あの、……先生」

「どうしたね？ 虚月くん」

「どうして、落書きがされているんですか？」

「……………落書き？」

先生は、途端に眉を顰めた。きよろきよろと周囲を見回して、「そんなものどこにもないじゃないか」と訝しげに答えた。けれど僕にはそれが信じられなくて、言わざるを得なかった。

「だって、ほら。先生にも、看護師さんにも、壁にも、ベッドにも……線や点がたくさん書かれているじゃないですか」

見ていて、気味が悪い。こんなものをずっと見ていられない。見ていたら、僕はあの虚無の世界を思い出してしまう。今思うと、あれは濃厚な死の塊だったのだろうか。それとも、なんなのだろうか。感覚的には理解できたが、言葉に表すことができない。

それと同じだった。その「落書き」は一つ一つが脈動し、生命の躍動をありありと見せつけていた。特にその線の広がる中心である点は、命という概念を感じさせるほどだった。

医者は僕のそんな言葉を聞くと、「疲れているのだろう。今日はゆっくり休んで、明日また会おう。その時に詳しいことを聞いてあげるから」

そう言いながら、医者はゆっくりと僕から離れていった。手招きで看護師を呼び、歩きながら話をしているのが聞こえた。

「これは前例がある。確かX県の病院だったのだが、ある患者が――そうだ、彼と同じくらいの年で、同じような症状を発したんだ。その子は退院後はちゃんとやって行けているそうだが、目覚めた当初は自分で自分の目を潰そうとまでしていた。

明日、その子の対処にあたった先生に来てもらうことにしよう。幸い、私は彼女の知り合いだからね」

「……その先生の名前は、なんというのですか？」

「――蒼崎橙子という名前だよ。患者の方は、黒桐式。旧名は、両儀式だ」

P r o l o g u e (後書き)

さて、最初の説明パートは飛ばしていくよー！

Prologue second

僕が次に目覚めたときは、橙子さんが病室に入ってきた時の小さな足音が響いた時だった。いったい何年あっていないのだろうか、と思いながら上体を起こす。

今日は痛まない。なかなか回復しているじゃないか。

「おはようございます、橙子さん」

「おはよう、じゃない。……なんだ、起きられるのか。心配して損したじゃないか」

僕が起きたことに驚きながら、彼女はため息混じりに言う。

この人が僕を心配していた？ ……馬鹿な。

そう思いながら、橙子さんの表情が真剣そのものだったことに気づき、本当に心配してくれていたことが嬉しかった。最後にあったのが……僕の間では二年前だが、実際には五年も経っている。彼女にとってそれは長い時間だったのだろうか、と思いながら、足音まで覚えた彼女を見た。

とても綺麗な人だ。赤い長髪はポニーテールにされている。いつもは眼鏡をかけているのだが、今日はかけていなかった。いつもどおり、アイロンをかけたようにパリっとしているシャツにジーンズという格好で現れた橙子さんは、医者というよりもビジネスウーマ

ンに思えた。その美貌は、昔のままだった。

——その全身に、落書きされたかのような線を引かれて。

開け放たれていた病室の窓から冷たい風が入り込む。ひゅう、と音を立ててそれは僕と橙子さんの間を通り抜けた。寒いな、といいながら橙子さんは窓を閉じる。その動作をしながら、彼女は僕に「お前のその”眼”さえなんとかなったら、お前は今日中に退院できるそうだ」と言った。

「へえ、随分早いんですね。式さんは一週間位必要だったらしいですけど」

僕が口にした式という人物は、僕の従姉>>いとこ<<だ。いつも着物をきている、どこか割れ物じみた壊れやすさを感じさせる女性だ。昔は両儀という名前だったが、今では結婚して黒桐という苗字に変わっている——といっても、僕が知っているのは両儀式ではなく、黒桐式だけだ。

僕の識る両儀式という女性は、僕の従兄にあたる黒桐幹也さんから聞かされている想い出話の中の人物だ。僕が魔術などを知っているということを知ってからは、聞かされることのなかった彼女の戦いなども少しは耳にすることが出来た。

最終的に、全て惚気話に変わってしまうのだが。

「おまえは何故が知らんが筋肉が全く衰えてなかったし、寝てる間に剥離しかかっていた筋肉がもうくっつきやがったからな。医者からすれば奇跡といったところだが、まあお前の知る式の件もあるしな——私は驚かないがな」

ふふん、と彼女は鼻を鳴らす。けれどそれを言ったあとで、僕は苦笑した。

「じゃ、なんでその式さんと幹也さんを連れてきているんですか？」

僕はちらと病室の入口を見る。そこから、赤い着物の袖が覗いていた。それと、黒い外套の端が。

バレてたか、といって黒い外套の主——黒桐幹也さんが僕の前に姿を現す。以前あった時とあまり変わらない感じで、上下が黒一色の服装で統一されていた。おそらく彼は黒っぽい服しか纏わないのだろう。

「ほら、式。せっかく従弟>>いとこ<<にあっただから顔くらい見せたらいいじゃないか」

「……まあ、そうだな」

そう言つて、式さんは幹也さんに手を引かれて病室に足を踏み入れた。老いを感じさせない瑞々しい純白の肌と、それと対照的な真っ黒な髪。瞳は墨を流し込んだような、美しい黒をしていた。

珍しく、赤いジャケットを着ていない。見れば今日は裏地のある、ちゃんとした着物だった。着替えだけで何分使ったのだろう。

旧知の人物と立て続けに再開すると、感動も若干薄いものとなる。だが彼らが僕のために遠路はるばる着てくれたのだと思うと自然と表情がほころんだ。けれど式さんは僕に再会の挨拶の一つもよこさずに、その黒い瞳で僕を見据えている。

「なあ、シキ。——おまえ、何が視えている？」

唐突に、彼女は言った。その言葉に掛けられた圧力を感じ、僕は医者に言ったように線と点が見えるということを話した。すると、それだけで橙子さんと幹也さんの表情が曇る。……なにか良くないのだろうか。それとも、別の原因なのだろうか。

思えば、なんの理由もなく橙子さんがこの二人を連れてきたことはない。つまり、橙子さんは僕のこの”眼”がなんなのか、検討がついているのだろう。

そしておそらく、解決策も。

「……シキ。お前が見ているのは——」

「死」と式さんの言葉を遮って僕は答えた。「あの、真つ暗な中で僕はずっとあれと向かい合ってきたからね。ああ、あの気持ちは多分一生忘れられないよ。僕は——あそこには戻りたくないと思いつながら、あそこに戻りたいと願っているんだから」

僕のこの言葉を聞くと、橙子さんと幹也さんはもつと暗い顔をした。それと対照的に、式さんは無表情のままだ。

そして、間を開けて彼女は言った。

「お前の見たものは、私の見たものと同じだ」

Prologue third

式さんは、僕にすべてを話した。

そして、僕はこの目がなんなのかを知った。

直死の魔眼。物事の終わりを見ることでできる魔眼の一つ。それの保有者は、この世界を見渡しても僕含め三人しかいないらしい。

ひとりは、僕。

ひとりは、両儀式。

ひとりは、遠野志貴。

最後のひとりは失踪して今では所在不明になっているらしいが、最後の目撃情報は倫敦でかの真祖の姫と共にいた——らしい。聖堂教会の情報だそうだ。

僕には魔術が使えないが、有名な退魔の家系に生まれたため、色々な所に名前は知れ渡っている。僕の家系はそちら側にはかなり名の知れた家である。両儀の家とはかなり昔から親戚づきあいをしているんだとか。

そして、その一人息子の跡取り。七夜に並ぶ退魔の家系なのだから、注目されて当然であった。魔術協会、聖堂教会、アトラス院……有名所はもとより、小規模な魔術結社などにも「虚月」の名前は知られていた。それで僕は蒼崎橙子さんと出会ったのだが——これ

は余談でしかない。

とにかく、式さんは眼を制御することに成功。ただそれまでは「魔眼殺し」の眼鏡を掛けていたそうだ。それも一時的で、すぐにやめたそうだが。

僕の魔眼の症状は遠野の息子よりも式さんのほうに似ているらしい。また、橙子さんの話によると「根源のどこかとラインが繋がってしまった」ということらしいが、それも含めて僕の身体的特徴は式さんに似ているのだ。血も繋がっているし、それを含めて式さんに教えを乞おうと思った。

「式さん、この眼の制御法、教えてくれますか？」

話を終えてあまり間を開けずに言葉を発した僕に対して、式さんは驚きを禁じ得無かったようだ。いつもは絶対に見せない困惑の表情を僕に向けながら、「おまえ、怖くないのか」と聞いてきた。

「怖くないと言ったら嘘ですけど、それよりも目先の問題を解決する方が先です。いい加減、この線だらけの世界にも飽き飽きしてきましたから」

「飽きた……か」

彼女はそう言うと、どこか儚げに笑った。その瞳は、慈愛に満ちたものにみえた。

まるで、同類を見るかのような――

制御法の殆どを教えてもらったが、ほとんどが感覚的なことだったので、僕は自力で制御することに決めた。

「それじゃあ私は、お前がもう退院しても大丈夫だということを言ってくる。それまで黒桐が持っている眼鏡をつけておけ。それが魔眼殺しだ。なんならやるぞ」

いっぺんに全て言ってから、橙子さんは部屋をでた。シーツの下から足を伸ばし、ベッドから以前と変わった様子もない足を抜く。その足で、恐る恐る地面を踏む。

痛みはない。僕はすでに動ける状況にあるようだ。そんな僕を見て、「オレの時は一週間も動けなかったのに」と呟いたため、僕は苦笑を漏らさざるを得なかった。ひんやりとした床の上を裸足のまま歩き、幹也さんから眼鏡をもらい、それを掛ける。

途端、線は消えた。——ああ、これで少しの間は安心だ。そう思いながら僕はふとした疑問を彼らに言う。

「えっと、式さんと幹也さんはどこに泊まるんですか？」

「ああ、オレたちはホテルをとつてある。……ま、橙子は自分でどうにかするだろう」

「っていうことは、橙子さんは泊まる場所がないんですね。今のところ」

それさえ解ればいいのだ。と思いながら僕はベッドに腰掛けた。僕の質問の真意が解らないようで、彼らは二人して首をかしげている。

た。

式さんから制御の方法を教わり終えた頃に、医者が来て言うには退院して良いそうだ。僕が当時着ていた藍染めの浴衣を受け取り、式さんと橙子さんに病室を出てもらってから着替えを済ませる。すでにひとりで着替が済ませられるほどに回復していて、案外これから先苦労はしないかもしれない、と思った。

式さんと幹也さんは病院に近いホテルだそうだから、退院してかすぐに別れた。それから、橙子さんに宿を尋ねた。

「え？ ……泊めてくれないのか」

まるで当たり前のことを要求するかのようには橙子さんはいった。もとよりこちらもそのつもりだったので二つ返事で承知した。恩は恩で返すのが礼儀というものだろう。僕は橙子さんの車に乗せてもらって、三年ぶりに自分の家に向かうことになった。

三年ぶりと言っても感覚的には一日ぶりである。変化していないことを望んでいたとき、ふと橙子さんが思い出したかのように僕に笑いかけた。「それにしても、君も隅に置けないな」

「え？」

いったいなんのことを話しているのだろうか、と思い僕は間拔けた返事をする。

「見舞い客だよ。どうやら毎日来ているようだよ。名前は——なん

て言ったかな、遠坂、だったつけ」

橙子さんはハンドルを切りながら答えた。このルートだと深山町へと進行している。だんだんと見慣れた街並みになってきた。遠坂、という名前を聞いて十字路を右に曲がった先にある真つ赤な屋敷を思い出しながら僕は驚愕した。

「遠坂、って遠坂凜ですか？」

「そう、その娘だ。毎日毎日、自分の時間を惜しんできているようじゃないか。なんだ、恋人か？」

「いえ、そんなわけじゃあないはずなんです、けど……」

遠坂さんには以前お世話をしたことがある。言峰教会の神父からの頼みで、僕が稽古をつけてあげたのだ。あの少女は今どうしているのだろうか、と思いながら僕は動く景色を眺めていた。

しばらくして、十字路に出た。ここから坂を登ると西洋屋敷が立ち並ぶ町並みへとなり、左へ曲がると和風の家が立ち並ぶ町並みになる。そういえば、僕の隣に住んでいた土郎君は今頃どうしているだろうか——そうすると、今まで僕に出会ってきた人物の顔が次々と思い出され、今頃どうしているのだろうかという、なんともいえない気持ちになった。

「……そういえば、識。お前、一人で暮らせるのか？」

「ああ……そういえば、両親はもういませんでしたね。まあ、経験はありませんけど……いざとなったらお隣さんに助けを求めますよ」

笑いながらさういう。土郎君は料理がとても得意で、彼の父――衛宮切嗣をいつも満足させていた。切嗣さんはが死んだのと同じ時期に僕の両親も死んだのだったと思い出した。ということは、彼が居候を連れてきていない限りあの家で今でも一人暮らしを続けているのだらう。

僕と違って人徳のある子だから大丈夫だと思うが。

「まあ、無理はするなよ。なんなら一週間位お前のところにいてやろうか。寂しいだらう?」

「大変嬉しいですけどお断りします。僕はこう見えてけだものですよ」

からかうように僕は言ったが、橙子さんは「それを承知のうえだ」ときっぱりと言った。驚いたが、明日には帰ってもらうことにした。

十　十

自宅にたどり着いたあとのことは特に何もなかった。あつたとして、橙子さんが今晚中に帰ると言い出したくらいだ。だから僕は眼鏡を貰っていいかということ聞き、それについて承知されてからももろの件に関してお礼を述べた。橙子さんは、「よせよせ」といって煙を払うように顔の前で手を振ったがまんざらでもなさそうだった。

そののち、橙子さんと別れ、僕は就寝した。

明日からは学校があるのだろうか、と思いながら。

直死の魔眼 / ? chapter one

青年のナイフが素早く動く。対立する鬼のような大男の体に無数の切り傷が刻まれる。それに対して男は、拳に煉獄を纏わせて拳を繰り出す。それをすべて避け、目にも留まらぬ動きで辺りを高速移動し、その度に敵の体には傷がつけられる。

まるで、蜘蛛のようだと思った。

大男は、倒れない。ある時は灼熱を生み出し、ある時は青年を焰のまとった拳で殴り、——その光景は、炎鬼>>えんき<<という鬼を思い出させた。

彼らは、殺しあう。

殺し合って、殺し合って、殺し合って——

最後に、大男の腕が青年の心臓を穿つ寸前——青年のナイフが敵の頸動脈を断ち切った。

敵は、白い粒子となって散っていく。青年はそれを見ながら、悪鬼のような表情で言った。

「また消えるのか——紅赤朱、あの夜のように、オレの前から姿を消すのか！」

その叫びが響き渡ったときには、青年もあの炎鬼のように光の粒子となって消えていた。

はっ、と目が覚めた。重たい瞼をこすりながら僕は布団から抜け出し、朝食を作ろうかと思い台所に向かう。清々しい冷気が僕の眠気を吹き飛ばしてくれたおかげで、今日一日は動き回れそうだ、と思った。小鳥の囀りを聞きながら、僕は台所に立つ。

別れ際に、式さんに渡されたナイフ。これを一体どうしようかと思いつながら台所の前に立つ。

……けれど、料理を作るやる気が起きない。よく考えたら食材がないじゃないか。溜息を付いて、土郎君のご厄介になりますかと腹を決めた。土下座でも何でもしてやろうではないか。

半ば自棄>>やけ<<になりながら、僕は自室へと戻り、制服に着替えた。穂群原高等学校の制服であるベージュ色の学ランとズボンを身にまとって僕は戸締りをし、お隣さん——衛宮士郎の家へと出かけていった。

もちろん、式さんからもらったナイフは忘れなかった。

徒歩五秒。とりあえず大きな門を叩くが、誰も出る気配がない。

「……よくよく考えたら、ここの屋敷は広すぎて誰も出るはずがないじゃないか」

笑って、僕は黙って中へと足を踏み入れた。

「わあああああああ！ その人、避けてえええええええええつ！！」

女性特有の甲高い声が、バイクの音と共に聞こえてきた。振り向くと、そこにいるのはバイクに乗ったボーイッシュな天然教師――

「藤村先生、なにしてんですか!？」

僕は慌てて半歩下がってバイクを躲すと、すぐにそれに飛び乗った。自然、藤村先生の後ろから覆いかぶさるような格好になる。

「きやつ！　ちよ、ちよつと君！」　「先生はちよつと黙つてて！　ブレーキが解らないんですか、アクセルを踏まないでください右折しようとししないでください！」

僕の言葉に鬼気迫る者を感じ取ったのか先生は静かにして、アクセルから足を外してくれた。僕はブレーキを掛け、ゴムの擦れる音を響かせながら止まろうとするバイクから足を伸ばし、スパイクの踵で地面を削りながら失速の手伝いをした。

バイクが止まり、そこでようやく僕は藤村先生から身を離し、地面に足を付いた。安堵の溜息をつく。

「……藤村先生、何をしたらこうなるんですか」

「え、つと、あの、――」

「先生はいつもこうでしょう。衛宮の機械類を触るなど言ったら触るし、あいつの修理の邪魔はするかと思つたら僕の料理まで邪魔し

たりして、構って欲しいのはわかりますけれど――」

「あの！ どちらさまですかつ！」

僕の話を遮って、先生は大声を上げた。その様子に僕は驚き、もしや解っていないのだろうかと思った。昨日鏡で顔を見たが、三年前と変わったところはなかった（はずだ）。それとももしかして、もう人の事を忘れているのだろうか。

「忘れたんですか？ 貴方の大好きな弟分の、虚月識ですよ。タイガーなのに鳥頭ですか」

僕がそれを言ったときには、背後に土郎君と、もう一人誰かがいた。時刻は午前六時四十五分。土郎が起きていても不思議ではない時間帯だ。

そんなことを思っていたから、僕は藤村先生の様子が全く解っていないかった。

「――識！ もう、死んだかと思ってたじゃない――！」

先程の三倍ほどの声を上げて、先生は僕に飛びついた。ジャンピング抱きつきである。あまりにも唐突で全体重をこちらにかけてきたため、僕は為す術も無く藤村先生に押し倒される。ぐっ、とうめき声を漏らしたが、先生の耳には届かない。

「三年よ三年！ もう、あの事故で倒れたあと、私がどれだけ心配したと思ってるのよ！」

「あの、せんせ――」

「いいわ、タイガー扱いも許す！ ええーい酒持ってこーい！ 識が帰ってきたぞー！！！」

まず落ち着いてくれ。僕はそう思いながら、僕を見下ろしている士郎君を見る。その件の士郎君は僕に頬擦りまでしている藤村先生の様子にあっけに取られた様子もなく、ただ僕を見つめていた。隣に立つ紫髪の少女も同様である。

「——識兄>>シキにいく！？ いつ退院したんだよ！」

「士郎くん頼む、こいつどけて！」

藤村先生に押し倒された状態の僕を見て目を丸くする彼に、僕は必死の思いで頼み込んだ。

直死の魔眼 / ? chapter one (後書き)

ご都合主義っぽいなー。
下手だね、どうも。

直死の魔眼 / ? chapter two

僕の復帰は三人に歓迎された。紫髪の少女——間桐桜とも面識のある僕は、衛宮ファミリィ（僕命名）に認定されているようだ。朝食を貰いたいと言ったら是非と元気のいい返答をされ、そのままVIP待遇を受けた。いつにもなく、三人がハイテンションである。

さて、料理を待つ間何をしようか……

僕は少し考え、藤村先生——いや、藤ねえといったほうがいいだろう。藤ねえと想い出話に耽ることにした。

「それにしてもさ、藤ねえ」

「んゝなにに？ 私は今とっても気分がイイから何でも聞いてあげる。特に識の話はね」

「最後に藤ねえが僕にキスをしたのは僕が小学六年生の頃だったよね」

「なっ！？ なななな、なんで覚えてるの！？」

僕は爆笑した。

台所からは、土郎が吹き出す音が聞こえた。

藤ねえの顔からは、湯気が立っていた。

あの時の思い出は忘れようにも忘れられない。酔っ払った虎は手

に負えないと思い知った時である。その後自分の行ったことに対する羞恥で、一週間ほど僕と顔を合わせることもできなかったか。

「僕はいろいろ覚えてるよ。……それにしてもどうしよう、今日、学校あるの?」

「話題の転換が早いわねえ。まああるわよ。識は私のクラスだから、実質転校生みたいな扱いになるかもね。HRで自己紹介でもする?」

「うん。……高校三年生までの勉強、終わらせておいてよかったあ」

「あー……そのことは当時、驚いたわ。もともと高認とって大学に行くつもりだったんでしょう?」

「まね。けど、中学校の間に高校二年までしか終わらなかったから諦めた。あと一ヶ月あればなあ」

「識、本当に頭いいわねえ。……こりゃ、今までの内申を一気にいいものにすることができかね。識なら」

「テストで満点を取ればモーマンタイ。簡単だよ」

簡単っていった人、はじめて見たわと藤ねえはテーブルに突っ伏していった。上目遣いで、頬杖をついている僕を見上げて、

「……よっし、先生と一緒に学校に行きましょう!」

「いや、士郎君と行くからいいよ」「いいえ、貴方は私と来るんです。色々あるんだからねー手

伝ってもらわよう」

藤ねえは、とても張り切っていた。こりゃ歓迎パーティーでも開かれるかもな、と思いながら僕は運ばれてくる料理に期待した。

十 十

とりあえず、僕が学校に登校してから下校に到るまで、僕は様々な人物と再会を果たした。柳洞一成、美綴綾子、穂群原三人組、……旧知の後輩が同級生というのも変な感じだが、年上として認識されているだけまだいいだろう。

しかしそれでも、遠坂凜には出会えなかった。

……そう、出会えなかったのだが僕は今、彼女と出会っている。

たまたまだ。下校しようと鞆をとって、廊下に出たら彼女がいた。

視線が合う。彼女は息を吞んで、僕の復帰に驚いていた。それが他の人物の驚き方とは違う、安堵の混じったものでもあり、しかし若干恐怖を含んだものでもあることはすぐに見抜けた。初め僕なんと声をかけたらいいか解らなかったが、取り敢えず声を掛けることにした。

「……久しぶり」

夕焼けに照らされる廊下。

「……お、お久しぶり、です——虚月先輩」

「凜ちゃん。お見舞い、ありがとう」

「え？」

僕は彼女に向かって微笑んで、また明日と手を振った。下駄箱では土郎君が待っていることだろう。僕は急ぎ足になりつつあったが、彼女の「待つて！」という叫びによってその歩みを止められた。

「どうしたの？」振り返ると、遠坂凜はどこか不安を持った表情で僕を見ている。

「わ、私を——許してくれるんですか？」

「……許すも何も、君は何か悪いことをしたのかい？」

僕がそう言うと、彼女は驚愕して僕を見る。「覚えてないなら——いいんです。思い出さなくて」彼女は懇願するように言った。夕焼けに照らされていても、彼女の顔は暗かった。彼女がそこまで言うのだったら思い出してほしくない何かなのだろう。それならば、思い出さない方がいい——そう思いながら、僕は改めてまたね、と声をかけて立ち去った。

直死の魔眼 / ? chapter three

その日のその後にあつた出来事は特に無かつた。ただ単に、僕は自宅へ帰ると通帳と財布を持ってきて自分の財産を確認するため、また生活費を確保するために銀行へと向かつたくらいだ。

商店街に行くと、会う人会う人が驚きの表情を見せながら、僕に色々な言葉を投げかけた。慰みの言葉や、励ましの言葉。その他にも色々あつたが、彼らは昔のままに僕を受け入れた。

今日の晩ご飯は魚料理だひゃっほい、とテンションを上げながら僕は帰路につき、その日は晩ご飯を食べて、寝た。その次の日もほとんど同じルーチンで、土郎の家に行き、学校に行き、食材を買い、寝る。その間に僕は過去の僕の友人らと再開し復縁していった。みんなは僕が驚くほど昔のままに接してくれたのがとても嬉しかった。

それが数日続いて――

僕が目覚めてから六日後のことだった。商店街で魚屋のおじさんに値段交渉をして、二百円値切ることに成功し魚を買った直後に土郎がやってきた。彼の両手にはパンパンになつたビニル袋が提げられている。僕はそれを一瞥して土郎に視線を向けた。

「やあ」

「よう」と土郎は愛想のいい笑顔で答えた。「識兄も買出し？」

「まあそんなところだね。……にしても大漁だなあ」

僕は彼の持っている食材を詰め込んだビニル袋を見ていった。土郎は微笑を浮かべ、返事をする。

「よく食べる虎ふじねえがいるからな。識兄もくる？」

「うーん、どうしようか」

顎に手を当てて、悩む。食材は冷蔵庫に入れておけば安心だが、世話になるというのもどこか気が引ける。

僕は――敢えてここは帰る足に任せて晩ご飯をこちそうになることにした。折角のお誘いなのだから、乗らなきゃ損と思いながら僕は首肯し、彼の家へと向かった。

その日の晩ご飯は大いに盛り上がった。久しぶりに藤ねえと土郎と共にする食事はいつもより美味しく感じた。桜ちゃんは僕に大盛りのご飯を注いでくれて、どうやって食べようかと僕の頭を悩ませてくれた。それに比べて僕よりも多めにつがれたご飯をモノの数分で平らげ、「おかわり！」と元氣よく桜ちゃんに要求する。

そんな光景を土郎と共に笑いながら僕は見ていた。

と、ぱくぱくと料理を口に運んでいた土郎がふと思い出したように声をかけた。

「なあ、識兄」

「ん？」

「これから、どうするんだ？」

質問の真意がわからないが、取り敢えず答えることにした。

「家に帰って、それから寝て……明日は学校にいくだけかな。いや、明日は休みか。ならどうするかなあ……」

ふんふん、と士郎は熱心に話を聞く。やけに食いつきがいいな、と思いながら僕は日常の生活ルーチンを話した。すると彼はうつむ、とお坊さんのように唸ると、

「なあ、ここに住めば色々と手間が省けないか？」

「あー……確かにそうかもね。良い提案かもしれない。僕が一人暮らしして変に無駄遣いするよりも、監督してくれる人がいたほうがいい。……勿論、二人は自宅からここにきてるんだよね？」

「ああ、そうだよ」

士郎から返事がきた。桜ちゃんは朝からこっちに來ているらしくて、なんとまあ健気なこと。邪魔しちゃう悪いとは思うが、他人より自分、不便より便利。

「それなら、確かに一緒に住んだほうがいいね」

かくして、僕はこの家に居候することになった。僕が士郎から聞いた、生まれて初めてのわがままでもあったし、嬉しくもあった。

藤ねえも、藤村大河という教師の立場で了承してくれたが、ただ

一人桜ちゃんだけが反対した。決まったときには小声で「もしものことがあったら……」と言って顔を赤らめていたが、あれはどのような意味なのだろうか。まさか何か想像しているのか、と思いながら僕は後輩の女子（いかがわしい妄想が大好きな子だ）を思い出す。

……うん、桜ちゃんはその子じゃないと僕は信じている。

僕は士郎くん部屋を一つ貸してもらった。そこは切嗣さんの部屋だった。

「まだ何も手をつけてないから親父の荷物だらけだけど、勘弁してくれ」

他に部屋はありそうだが僕がここを指定した。それだというのに謝ってくる士郎君はとても律儀だ、と思う。その律儀くんに僕は「こっちのほうがりやすいからなにより」と返事をして、おやすみとあいさつを済ませた。既に隣の部屋から僕が持っている武器や礼装は持ってきていたため、魔術師の工房である部屋を使えることは僕にとって幸運だった。

だが、そこで少し疑問が湧いた。——自身の父親の部屋が、一種の魔術工房化していることを彼は知らないのか？

あの様子だと、その通りだ。

「教えなかったのか」

あの人らしいや、と僕は思った。敷いてあった布団に入り、ぼくは深い眠りについた。

真夜中に目が覚めた。なぜかは解らない。が、僕は危険を察知した獣のように目を覚まし、足の思うままに道を歩いていった。暗い道を、僕はゆっくりと歩く。まわりつく闇を払うように、僕はナイフを握った手を振るう。

数々の血を吸ってきた——わけでもないが、ただ一人の男を殺めたこの白刃を、僕はお守りのように持ち歩いている。それは、いつでもどこで敵に狙われてもいいように、という心境からと、願掛けめいた、「これを持っていれば大丈夫」ということからだ。

それとも、僕は——虚月識は、敵を求めているのだろうか。

解らない。

わからない。

果たして、敵はそこにいた。「それ」そのものは敵ではなかったが、それに付き添っている大男は、僕の敵だ。

「——久しぶりだね、イリヤスフィール。切嗣さんへの憎悪はなくなっただかい？」

「三年ぶりね、シキ。キリツグへの恨みの代わりにあなたに対する憎悪なら以前の倍になったわよ」

純白の少女——イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは僕

にいう。確かに恨むのも無理もない。それまで切嗣を殺すという憎悪だけを頼りに生きてきた少女にとっては、衛宮切嗣という男が最後までイリヤスフィールという実の娘を愛していたという真実は酷だったかもしれない。そうしたほうが、純粋な殺意だけで生きてくれたのだから。

彼女の表情は、以前よりも大人びていた。成長した様子はないものの、内面的な成長はとても大きかったようだ。僕は彼女の浮かべる、朧月のような淡い微笑を見ながら、ナイフを鞘から抜いた。

「――僕は聖杯戦争には関係ないはずだが」

「あら、気づいてないの？ 貴方の右腕――聖痕>>ステイグマ<<が刻まれてるわよ。マスター候補を殺すことはマスターの当たり前の行動でもあるし、貴方を殺すことは私の悲願になりつつあるの」

純白の隣に立つ、岩石のような大男が白い吐息を出す。雰囲気同様の褐色肌に彩られたその肉体は、腰に巻かれた布で秘部を隠されているだけでほかは裸だ。そして……その右手には、岩を削りとつただけの大剣が握られていた。

「やっちゃんえ、バーサーカー」

斧としても使えそうなその剣を構えて、その大男は咆哮した。

「さあ――殺し合おう」

僕は、歓喜してそういった。

直死の魔眼 / ? chapter four

虚月識の両目が紅く輝く。その瞳は伝承に伝わるそれ——直死の魔眼そのものだった。月光に照らされたそのナイフは本来の持ち主よりも、現在の持ち主に似合って見えた。藍染めの浴衣に似た、動きやすそうな服装をした彼は時代錯誤にもほどがあるだろう。

だが、そのことはどうでもいいこととして扱われる。その佇まいは一種の神秘性を放ち、まるで遙か高みにいる『何か』のような性質を醸し出していた。

それが、少女には気に食わない。霊格として識を圧倒的に上回るバーサーカー——英霊を使役していながらも、彼女が彼を恐れる点はそのにある。

相手が誰であろうとも、気にせず殺しに来る。彼が戦闘を行うときに思考されるのは敵をどのように解体>>ころ>>すことだけである。

その彼が直死の魔眼という最凶の魔眼を持っていることを先日知った彼女は、あまり時間はかけられないことを判断した。

聖杯戦争が本格的に始まる前に、バーサーカーの『十二の試練>>ゴッドハンド<<』を司>>つかさど<<くる「点」を突かれあつけなく敗退するわけにはいかない。それではアハト翁への面子が立たないというものだ。

そして、イリヤスフィールは識が少なからず魔術回路を持っていることを察知していた。下手をすれば何かの要因で戦闘中に召喚が

行われるかもしれない。

そうなれば、この男が最優と言われる「セイバー」のランクを持ったサーヴァントを呼び出すことは眼に見えていた。それほどまで強力な人物であると、彼女は疑わなかった。事実、彼女との前回の邂逅において彼は、彼女に会ったためだけにアインツベルン家の総本山を叩きに來たのだから。

そして、立ちふさがる敵を全て屠り、彼女に会ったのだ。それが彼女には信じられないことでもあったが、識の能力を裏付けするにはそれだけでも十分だろう。

「■■■■■■■■■■———！！」

バーサーカーが叫び、識に突進する。その速度は音速に達するかと思えるほどだった。識に肉薄したバーサーカーは、横薙ぎに大剣を振るう。

だが、それはいとも簡単に回避された。識の表情には笑みさえ浮かべられている。それが、彼が以前よりも強くなっていることをはっきりさせていた。

サーヴァントというのは人間とは全く違う存在だ。本来なら触れることのできない霊体である。そして、その正体は生前、伝説になるほどの功績を上げた『英雄』だ。そしてそれは聖杯戦争の要となる聖杯のバックアップを受け、生前よりも強化されて召喚される。

このバーサーカーは全サーヴァントの中でも最強と言える力を持っている。ただでさえ圧倒的な戦力を、『狂化』によってさらに凶悪なものにしている。理性を奪うことにより本来よりも能力を底上

げするというものだ。

本来これは弱いサーヴァントに使われるものだが、アインツベルン——始まりの御三家と言われる聖杯戦争の古参の一つは、それを最強と言える存在に使用した。

その力は圧倒的。

それを上回る速度を見せた”人間”は、迷わずバーサーカーの右腕に走る『線』を断ち切った。そしてそのカウンターとして、バーサーカーの左拳を受けることになる。

けれど、その拳さえも識は躲した。

振るわれた正拳に飛び乗って、彼はそのまま左手の先の線も断つ。

一秒の間に、彼はバーサーカーの両手の機能を停止させた。

「——■■■■■！」

切り落とされた左手と右腕。バーサーカーはそれを痛がる様子もなく、強烈な頭突きを識に浴びせた。それを防御したが、それだけで識の左腕は碎けた。だが左手一本の代償に命が助かるのだから良い、と識は判断する。

碎けた腕からは血が吹き出している。自らの軌跡が魔法陣を描いていることに識は気付くことはなかった。イリヤスフィールでさえ気付くことができなかったのだから魔術師でもない彼が気付くことができるはずはない。

「――断ち切る！」

瞬間、識の姿は消えた。そして、白刃が煌めきバーサーカーの首筋を斬りつけ、通りすぎる。ザザザザ、と大きな音を立ててブレキをかける。目に映らない速度で彼は駆け抜け、そして、また駆けた。あまりにも直線的な攻撃は、しかしバーサーカーでさえ捉えることはできない。

業の壱。虚月の一族に伝わる業の一つ。七夜の体術に似ているとも言われるが、それを圧倒的に上回るほどの速度、威力を持つ。

蒼い閃光は何度も何度もバーサーカーを斬りつける。その間にもバーサーカーの両腕は回復していくが、回復していく合間合間に別の部分の”死”を断ち切られる。

その姿は、人間。

その刃は、神速。

月光すらも翻弄していた彼は、単純なスタミナをセーブする為にその攻撃をやめた。既にバーサーカーの武器は捨て置かれている。それを使う分だけ自らの速度が敵に劣っていくことを彼はその本能で読み取っていたためだ。そのことを思い、識はバーサーカーの手が自分に伸びる前に距離を取れると確信していた。

だが、その一瞬の静止を狙って、バーサーカーはその両手を伸ばし――捉える。

万力のような握力に耐えるために、識は歯をくいしばる。どちらかの手が使えばよかったのだが、残念なことにすべての機能を止

められていた。骨がみしみしと音を立て、識は顔を歪める。バーサーカーは彼を、地面に叩きつけた。

ぐちゃり、という音と共に彼はたたきつけられた。それでもなお生きていることがイリヤスフィールにも、彼自身にも驚きだった。

「——ああ、お前はオレを満たしてくれるんだな。

なんて幸運だ。オレは目覚めてからすぐに、戦える——！

みたせ、みたせ、みたせ（閉じよ、閉じよ、閉じよ）——我が欲望を、我が殺戮衝動を、我が全てを満たせ！

ここに契約しよう。——オレは、お前を犯>>ころ<<す。その肉片までむしゃぶりついてやろうじゃないか」

そして、魔法陣は起動した。識は自分の言葉が聖杯戦争のサーヴァント召喚の言葉になるとは思ってもいなかった。だが、この現状を打破するにはそれが一番確実であるということさえ思えば、彼にとってそれは幸運であった。それに対して、イリヤスフィールは己の失敗に表情を歪める。

まさか、このようなタイミングで、しかも偶然呼び出されるとは思いもしていなかった。イリヤスフィールはバーサーカーに石斧を拾わせると、攻撃するよう指示した。

だが、遅い。

——あたりに立ち込める煙の中から、芒、とした輪郭が浮かび上がった。希薄なそれはだんだんと濃くなっていき——識の前に立った。

「オレを呼び出したのはお前か？」

それは、とても現代風の格好をしていた。服装は紺色の学生服の上に真つ黒な外套を羽織っている。あまりにも不釣り合なその格好をした青年の両手には黒い棒が握られていた。そして、それには七つ夜という銘が刻まれていた。棒に銘が刻まれていることに違和感を覚えた識は、それが飛び出しナイフだということに気がついた。

「もしもそうならば、初めまして、我が麗しきマスター。
しがない殺人貴をご指名頂き、どうもありがとうございます」

演技じみた、仰々しい動作で彼は深々と頭を垂れる。そして、その顔を上げた。

——その青い双眸は、欄>>らんくくと輝いていた。

それは、識の真逆。

「そして、純白の人外と古代の英雄よ。

——ようこそ、蜘蛛の糸で作られた惨殺空間へ」

彼は、薄く笑みを浮かべた。

直死の魔眼 / ? chapter four (後書き)

【クラス】

バーサーカー

【マスター】

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

【性別】

男性

【身長・体重】

253cm・311kg

【属性】

混沌・狂

【真名】

不明

【筋力】

A+

【魔力】

A

【耐久】

A

【幸運】

B

【敏捷】

A

【宝具】

A

【クラススキル】

狂化：B

理性を代償として能力を強化する、バーサーカーを特徴付けるクラス別能力。ランクBなので、大半の理性を失う代わりに全ての能力値が上昇している。

【保有スキル】

戦闘続行：A

心眼（偽）：B

勇猛：A+

神性：A

直死の魔眼 / ? chapter five

彼はそう宣言し、同時に――姿が消えた。

「――!？」

バーサーカーは慌てて辺りを見回す。だが、どこにも見えない。だが、どこから、小さな風切り音が聞こえている。そして、それが大きくなり――バーサーカーの腕を切り落とした。

「■■■■■■――!？」

巨大な石斧を振り回し、飛び回る小蠅を振り払おうとする。だが、柔らかい動きで男はそれを悉く回避し、あろうことかその先端に飛び乗った。

「閃鞘・八穿せんさ はっせん」

次に視認できたときには、男はバーサーカーの頭上にいた。そして、右手のナイフで彼の左目を突き刺す。そして、それを起点にして半回転し、バーサーカーの巨体に踵を打ち込む。そして、もう片方のナイフで狂戦士の右目を穿った。

そして、蜥蜴のようにバーサーカーの体に張り付いた彼は、最後に右足で木の幹のような首を蹴り飛ばし、その衝撃で彼から離れる。勿論、深々と突き刺さったナイフは同時に抜けていた。

「■■■■■■――!?!?!?!」

激痛に、バーサーカーは絶叫する。そして、恐らく近くにいるであろう敵を攻撃するために石斧を振るう。

しかし、それは全て無駄。

Bランク以下の攻撃が通らないバーサーカーに、大きな傷を負わせた。それは聖杯戦争序盤では大きな痛手となる。マードーは相手が激昂したことを確認すると、追撃はせずに、小出しの攻撃で相手を翻弄することにした。

イリヤスフィールは敵をマスターしかもち得ない『眼』でみていた。相手のサーヴァントのスキルやステータスを表すその数値を見て、彼女は驚いた。

「マードー……殺人鬼？」

クラス名は、マードー。

イレギュラーサーヴァントとして、この青年は召喚されていた。持っている武器は日本の退魔一族『七夜』が用いた武器だということとは読み取れたが、それ以外の能力が彼のステータスからは読み取れなかった。

否、あるといえばひとつだけある。

「蒼の浄眼に、直死の魔眼ですって？」

そんな、神秘の二重保持者は聞いたことがない。そもそも直死の魔眼を持っている者たちは全て生きているはずだ。そして、浄眼を持っている七夜の一族は既に滅びている。その矛盾を解釈するために、イリヤスフィールはすぐに一つの仮説を立てた。

「まさか——七夜一族の生き残り？」

その言葉を耳聴く聞きつけ、バーサーカーに小さな傷を負わせていたマードーは足を止め、識の近くまで後退する。

「ご名答といったところか。純白の人外。……いや、人造人間>>ホムンクルス<<か？ 瞳の色からしてそうだろう。そもそも、オレの眼で見れないものはない」

そう言うと、彼は自らの両目を指して言った。

「この両目、オレは一度壊していてね。知り合いに頼んで、壊れたオレの眼を修復できる眼を持ち出して、それを使って修復し——オレは両目を取り戻したのさ。まあ、おかげで死まで見れるようになったちまったんだがね。

邪魔で仕方ないよ、この線は。

それで？ これ以上お預けを食らって黙っていられるような”狗”じゃないぜ、オレは」

気だるげに話しながら、彼は逆手に構えた飛び出しナイフをクルクルと回す。敵に引く気がないことを読み取ったイリヤスフィールは、二人の『直死』持ちに出会ったことを僥倖と思いながら撤退を決めることにしたようで、小さく溜息をつくと、七夜に言う。

「残念だけど、これ以上のダンスは遠慮しておくわ。今日は準備不足もあつたし、はじめからサーヴァントと交戦するつもりはなかったから。

じゃあね、シキお兄ちゃん」

そう言う、イリヤスフィールは「戻りなさい、バーサーカー」と回復しきった狂犬を呼び戻す。彼はイリヤスフィールをその大きな手で優しく抱えると、瞬時に姿を消した。それから少しの間響いていた、象が地面を蹴り、走るような音はすぐに聞こえなくなった。

「まったく、呼び出しの方法が雑なマスターだ。守護者としての契約を果たした後、無茶な方法で呼び出されたのは数しれないけど、唐突すぎるのはいただけないな」

バーサーカーの気配が察知できなくなってから、マードーは刃を収納し、ナイフを仕舞った。その動作があまりにも速すぎて、識にはナイフがひとりでに消えたようにしか見えなかった。

識はほう、と感嘆してからナイフをしまふ。それから彼は答えた。

「そう言われても僕はお前がなんなのかよく解っていないし、なぜ出てきたのか全く見当がつかない」

「それじゃ、ただの縁えにしだと思えばいいさ」

「ただの」縁、か。——そうだったらどれだけいいことか」

マードーの言葉に、識は首を傾げた。

直死の魔眼 / ? chapter five (後書き)

【クラス】 マーダー

【マスター】 虚月識

【性別】 男性

【身長・体重】 173 cm・60 kg

【属性】 中立・悪

【武装】 短刀「七夜」・短刀（銘は不明）

【筋力】 C 【魔力】 E

【耐久】 D 【幸運】 B+

【敏捷】 A++ 【宝具】 ??

【クラス別能力】

狂化：D

殺人鬼を特徴付けるスキル。彼の場合殺人鬼と言うよりも「殺人貴」なので、ランクは低い。しかし、一部の能力値の上昇はある。

気配遮断：B

アサシンのサーヴァントではないため、本来ならばランクは低いが、七夜の生き残りということも相まってランクBとなっている。任意型ではなく常時発動型のため、余程神経を集中していなければ、並のサーヴァントでは戦闘中でも何度もマーダーの姿を見失うだろう。

【保有スキル】

・心眼（偽）・（真）：B

虫の知らせや第六課に属するもので、天性の才能による危機予知

能力（前者）、また、経験に裏付けされた予測による危機回避。どちらも持つ彼は、並のサーヴァントでは傷ひとつ付けられない。

・ 宗和の心得：C++

同じ相手に同じ技を何度仕掛けても、命中精度が下がらない特殊技能。気配遮断のスキルと相まって、高い効果を発揮している。

・ 投擲（短刀）：C++

このランクになると、弾丸並の速度での投擲が可能となる。

・ 直死の魔眼・浄眼：EX

本来ならばどちらも先天性のもので、両方を持つことは不可能だが、特殊な方法で手に入れている。

浄眼は、今は亡き日本の退魔一族「七夜」だけが持つことが出来た人外・霊体を見る・触れる事ができる特殊技能。強いものになると未来視の域になり、敵の行動がある程度予測できるようになる。

直死の魔眼は、モノの死を視ることができるという未来視の一種。それを物理的な方法でなぞりながら断つことによって、それを真の意味で「殺す」事ができる。殺された箇所の再生は不可能。点を突くと、突いたものそのものを「殺す」。識の持っているものとは違い、己の理解している範囲内での死しか見ることができない。しかしサーヴァントになっているため、万物の死が見れるようになっていく。現在確認されている保有者は三名だけだが……？

直死の魔眼 / ? chapter one

——
どうして、こんなことになってしまったんだろうか。

僕の目の前には、心臓を貫かれた士郎がいる。なぜそうなったのか、僕は知り得ていたのに——何も手を出すことが出来なかった。マードーは彼を■した敵を追いかけて行ってしまった。そして、つい先程僕の隣を、真っ赤な外套をはためかせて、サーヴァントが駆けていった。おそらく、彼と戦っていた別のサーヴァントだろう。

「まさか——召還する前に倒されるとは、ね」

弟分が殺されたというのに、僕は冷静だった。正確には、一周回って冷静になったというべきか。とにかく、僕はこの状況を把握するので精一杯だった。

だから、近くに誰かが近づいてきたら、敵としか認識出来なかったのだろう。

——だれも居ないはずの廊下に、革靴の音が響いた。

僕の行動は迅速だった。敵の姿を見もせずに、腰に差していたナイフを抜く。そして、獣じみた動きで振り向き、そのまま跳びかかる——

——刃は、ツインテールの少女の動脈に向かっていった。

「……、……キ！ 起き………のやるつ！」

「目覚——、シ——。仕方——第一の——」

「……うるさい」

目が覚めた。目の前には金髪赤眼の式と目元が隠れたニメートルほどの巨体があった。

いや、こわい。

金髪の式（？）は犬歯剥きだしてこっち睨んでるし、ってかマウント取られてる。ニメートルくらいのおっさんはその後ろで何やら詠唱している。仏教徒的な詠唱だったが、しかしなんだこいつ、こわい。

気づいたら右手にナイフ。どうしよう、これを使えば逃げ出せる気がするけど逃げられる気がしない。どうせ夢なら女の子いっぱいハーレムウハウハとかがいいというのに、なんでむさいおっさんと怖い式が出てくるのもういやだ。

「なにいつてんだオマエ」

「夢だからこそ」

「俺たち（我々）の出番があるのだろうか（あんじゃないか）！」

「お願いします、夢から出て行ってください。そして藤ねえでもいいからかわいい女の子一人連れてきてくださいお願いします」

マウントから抜けだしての即行土下座。これで勝つ。

「だが断る」

ネットスラングにネットスラングで返す変人二人。金髪の式はよく見たら男だった。女にしか見えないっていうか女装している。なにこれこわい。

「いいか、シキ、これは夢だ」「そして、我々は貴様の持っている刃（の持ち主に）殺された」

「復讐鬼ー！ 誰かー、誰か助けてー！」

一瞬目に包帯を巻いている、マードーそっくりのイケメンの姿が浮かんだが、その途端にマードーが出てきてその二人を殺した。なにこれこわい。

「マスター、無事か！」

「あ、うん」

「心配したぞ、いきなりどこに行くかと思ったら……」

くどくど。あれ、コイツこんな熱血キャラだっけ。ああこれ夢か。

そしたらなぜか目に包帯を巻いているイケメンが登場。え、厨二病？

「七夜——なんでおまえがここに」

「そういうオマエこそなんでここにいるんだ！ 遠野ツ！ オマエはアルクェイドとロンドンに行ったはずじゃ——」

ぶげら。もきゅもきゅ。いきゅいきゅ。いっくん。

「——■■■■■！——」

真っ黒い球体が現れて、二人を呑み込んだ。

なにこれこわい。

「——起きろ、でないとその無防備な顔にキスするぞ」

声が聞こえた。

目が覚めた。先ほどの夢は何だったのだろうか、ひどい悪夢だった。

「なんだ、そんなに私のキスが嫌か」

目が覚めると、目の前に橙子さんがいた。思わず凍りついた。第一ボタンの留められていないワイシャツからは白いうなじが覗いている。妖艶な笑みを浮かべて僕を見ていた彼女は、「おはよう」と言っ僕の上から退いた。上はワイシャツ、下はヴィンテージ仕様のジーンズを履いていた。うん、朝から美人を見れるとは。しかもなんかエロい。眼福。

何考えてんだ僕は。

「おはようございます」

「しかしなんだ、なんで衛宮士郎の家にいるんだ」

「んん？ ああ、かくかくしかじかのことがあります」

「なるほど、わからん。朝のお前はやはり頭が回らないようだな」

「いやあ」

「褒めとらんぞ」

「え、マジで」

「大マジだ」

などとやり取りをしてから、僕と橙子さんは世間話を始めた。式さんと幹也さんはどうなってるのかとか、なんであんな意味不明なセリフを言ったのかとか、――

「……って、なんで橙子さんがここにいるんですか!？」

「なんだ、居て悪いか。それに今頃か」

「いえ、悪いってわけじゃあないですけど……どうやって入ってきました?」

「ん? ああ、結界があつたから、ちょちょっと、魔術でステルス化して、忍び込んだ」

「子供の悪戯みたいに言わないでください!」

「いやあ、だつて敵意持つてなかったら普通に通すタイプのやつだったからな。あとから後悔したぞ」

「あんたそれでも世界トップクラスの魔術師か!？」

「失礼な。伽藍の洞の社長だ」

「そうですけどっ!」

けらけらと彼女は笑う。しかしなんだ、この人、僕に対しての扱いが違うじゃないか。もっと幹也さんにするみたいな扱いをしてくれてもいいじゃないかとは思う。言葉遊びではぐらかされた気がしてならない。

取り敢えず僕は着替えるつもりだったので、彼女に部屋から出てもらうように催促する。しかし彼女はソレに応じるつもりはない。数瞬前から、虚空を睨みつけている。おーい、橙子さーんと声をかけても無駄だった。

「なあ、識」

「はい、なんですか」

「おまえ、幽霊でも飼っているのか」

「は——？」

幽霊を”飼う”？ 憑かれるのではなく？ 何を馬鹿なと一瞬思ったが、僕はすぐに幽霊が何を指しているのか理解した。僕は”幽霊”に実体化するように声をかける。眠いんだから起こすなよ、という返事と共に彼は姿を表した。

昨日と変わらない、紺色の学生服。その上に羽織った、真っ黒な外套。彼は僕の真横に佇んでいた。黒色の瞳で、じっと橙子さんを見るマードー。その二人の間には、どこか、知人同士の空気が流れていた。

馬鹿な、と思う。なにをどうすれば七夜の一族の生き残り、名門蒼崎の長女が知り合いなのだろうか。僕は頭に浮かんだ考えを振り払うと、橙子さんに彼のことを紹介する。

「昨日召喚した、マードーです。正式に聖杯戦争に参加することには、まだしていませんがね」

上の空だった。

「——まさか、コイツを召還するとは。しかし、なんでコイツが英雄などに……？」

橙子さんがボソリとつぶやく。なんと言ったかは聞き取れなかったが、顎に指を当てて考え事をしているようだ。こうなってしまうては梃子でも動かない。

仕方ない。僕はマードーに周辺の見回りを頼む。彼は眠そうにあくびをしながら霊体化し、姿を消した。それを見てから僕は上着を脱ぐ。その途端橙子さんは甲高い声を上げると僕に背を向けて、何やらぼそぼそと独り言を言っていた。

何を驚いたのだろうか、僕の行動にだったらちよつと困るなあとか思いつつ学生服に着替える。

「そういえば、サーヴァントの召喚は何体程度されたんでしょうか」

「解らん。その辺りは言峰神父にでも聞かないとわからないだろう。今日中にでも言峰教会に行くか？」

「それもいいですね。マスター登録も必要ですし」

そんなことを話していると、台所の方から「識兄ー、ご飯できたよー」という声が聞こえた。もうそんな時間だったのか。

僕は橙子さんを促して、部屋を出た。

「聖杯戦争、か」

十年前の切嗣のようなへマは、絶対にしない。

僕が聖杯を——破壊する。

直死の魔眼 / ? chapter one (後書き)

今月いっぱい毎日更新が継続できる……かも

直死の魔眼 / ? chapter two

朝食後、久々に僕は士郎くんと勝負することになった。竹刀剣道は僕の得意分野ではないのだが、可愛い弟分に付き合うのも一興と思っ てやってみたのが始まりだった。案外実戦経験が役に立ち、また実践にも使える動きがあるので、僕から彼を誘うこともしばしばだった。

それもこれも三年ぶりである。僕にとっては昨日のような出来事も、彼にとっては三年も前の色褪せた記憶だ。

「腕は鈍っていないよね、士郎」

「そっちこそ」

審判は藤ねえ、観客は桜ちゃんと橙子さん。復活の舞台にはちょうどいい程度だろう。

「――構え」

いつもは聞くことのできない、真面目な声が聞けた。

空気が固まる。士郎から発せられる敵意があまりにも懐かしく、僕は笑みを浮かべて、竹刀を固く握り直した。

「始め！」

その一言で、士郎くんが僕に向かって駆けた。一撃目はばか正直

な面。僕は竹刀の腹でそれをいなすと、“空いている左手で彼の頭部に掴みかかった”。それを読んでいた彼は頭を下げると、そのままタツクルする。僕の腹部に彼の肩が食い込んだ。

小さな呻き声と共に、僕は地面に倒される。

——それで、目が覚めた。僕らがやっているこれはただの竹刀剣道ではないと、久々に思い出した。

擬似訓練。僕から言い出したのにすっかり忘れていた。

左手について受身をし、そのまま立ち上がる。二撃目を入れるために迫ってきた竹刀の先端を、首を動かして避ける。

十

土郎の放った突きは、いとも簡単に躲かれた。識は竹刀を大きく振って、土郎の胸を取りに行く。土郎は咄嗟に左手を離して、その一撃を守りに行った。

バットで殴られたような衝撃。彼の肘から先は痛みで麻痺した。激痛に顔を顰めながらも、彼は後方へ飛ぶ。それを追うように、体勢を立てなおした識が肉薄した。片手で繰り出しているからこそ出せる蛇のような動きはどこに来るのかの予測がつかず、土郎は防御するので手一杯だった。

そこに、大ぶりの一撃がはいる。それを好機ととり、土郎はそれを弾いた。

だが、それが失敗だった。

弾かれたのは、竹刀だけ。識は背中を大きく反らせ、士郎の方に踵を打ち込む。識はその反動で後ろに飛び、竹刀を掴んでネコのように着地する。士郎はそのまま吹き飛ばされ、背中から床に打ち付けられた。

「僕の、勝ちだね」

「やっぱり識兄にはかなわないや……はは」

大の字になって、士郎は目を細めた。この痛みも、あの動きも、全て三年ぶり。彼には全てが懐かしかった。彼はようやく、自分の義兄の復活を実感した。

十

結果は僕の圧勝に終わった（ようにおもえる）。しかしこちらはブランク付きとはいえ、彼から何度か手痛い打撃を食らっている。それも、実践なら致命傷となりうるものを。僕が眠りこけている間、ずっと訓練してきたようだ。

だが、今回のことで十分解った。どうやら、昨日の僕の動きは殺し合いと意識していたからできていたようで、普段の僕の運動能力は著しく低下していると考えて差し支えない、と。

「——これは、言峰神父にでも鍛えてもらうしかないかもしれないな」

あのマッチョ神父ならば、何とかしてくれるだろう。切嗣さんの

宿敵に鍛えてもらうのは少し忍びないが、知り合いの中で最も強いなら彼か、式さんだろう。もう何年も戦うことをやめている式さんに助けてもらうよりも、ついこの間まで戦いに戦いを重ねていた彼と訓練するほうが余程いいだろう。

そんなことを考えているうちに、士郎の手あてが始まった。どうやら腕に受けた一撃が大きかったようで、骨に罅が入っていたようだ。手加減したつもりだったがまさかそんなことになっているとは思ってもせず、僕は少し驚いた。士郎は「このくらいへっちゃらだよ」と笑いながら言っていたが、果たしてそれは何故だろう。僕はそれが気になった。

「識、それじゃあ行くか」

「え？ ああ……解りました、行きましょう。士郎、それじゃあまたあとで。ちよつと出かけてくるよ」

「解った、気をつけてなー」

罅が入っている方の腕をぶんぶんと振って、彼は僕を見送ってくれた。

「ふむ……おまえが、か。師弟揃って聖杯戦争に関わるとは」

胡散臭そうな神父は、以前見た時と変わりなかった。三年ぶりに会ったというのに、彼は眉ひとつ動かさず僕の復活を受け入れていた。僕にはそれが少し意外だった。

彼にそれを聞くと、「人が一人生き返るくらい、大した奇跡では

ない」と言われてしまったが。

僕は死んでない。

「それで、マスターとしてお前は参加するといふのかね。そのマ
ーダーとやらと一緒に」

「勿論だよ。けど、……驚いたな、霊体が見えるのか」

「そんなはずがあるまい。英霊ともなるとその存在は神秘のそれと
匹敵する。私の所属を忘れたか、それに気づくはずがあるまい。そ
れに、どのような道理で怨敵の本拠地に丸腰で入ろうと考える。そ
れこそ愚の骨頂だろう」

「確かにそうだ」

薄笑いを浮かべた言峰は、僕の隣に立つ蒼崎橙子を見る。その瞳
は生者のそれを感じられない、まるで死人のような瞳だった。彼の
薄気味悪さは、今も昔も変わらないようだ。

「……何か私に用か」

「いや、魔法使いの姉——封印指定の人形師が、教会に顔を出すと
は、と思つてね。驚いた」

「ふん、『協会』でないなら私の居場所はどこにでもある。勿論、
長居はできないがね」

「成る程。それで、虚月識、私に二つ要件があるといったな。二つ
目は何だ」

「ああ、僕を鍛えて欲しい」

「……ほう？」

怪訝気な瞳で、興味深そうな表情で彼は僕を凝視する。まげじとこちらも凝視する。

「三年のブランクは大きいんだ。あなたの八極拳を伝授してもらいたい」

「……聖杯戦争の開始直前にそんなことを言い出すとはな、……」

初めて、言峰綺礼の笑みを見た気がする。悪魔のようなその表情を、僕は忘れないだろう。

「宿敵の弟子になると願うか、面白い。明日から毎日ここへ来い。学校帰りでもいいぞ」

そう言うとは彼は背を向けて、祭壇の奥へと消えていった。僕はその瞬間に足で陣を描き、踵から魔力を流し込む。床下からめりめりという音が響き、甲高い声で鳴いて、それはどこかへと消え去った。

「……今のは、使い魔か」

「ええ、練成しました。彼が一体何をするか、予想できませんからね」

僕はそう言うと、教会を出た。

蒼崎橙子と虚月識の去った教会で、言峰綺礼は黒鍵を地面に突き立てた。ギャツ、という声と共に、“何か”が貫かれた。彼はそれがなにか確かめようともしせずに黒鍵を引き抜くと、小さく溜息をついた。

「師匠を出し抜こうとは考えないほうがいいぞ、虚月識」

そういつと彼は、少年たちの呻き声の響く、教会の深部へと足を向けた。

——聖杯戦争の開始は近い。

直死の魔眼 / ? chapter two (後書き)

短いながらも戦闘しーん

うん、書き溜め限界ギリギリまで放出したら……いけるの、かな？

直死の魔眼 / ? chapter three

それから数日間は何もなかった。いつもどおりの日常が繰り返され、聖杯戦争のせの字も出なかった。

だからこそ、気を抜いていたのかも知れない。

聖杯戦争の開始は、あまりにも唐突に、あまりにも迅速に訪れたのだから。

十

言峰綺礼に弟子入りして数日が過ぎた。放課後の学校というのは案外人氣がなく、なるほど、肝試しには持って来いだなと僕は思っていた。

柳洞の手伝いを終えた僕は、一人で学校をうろついていた。正確には、士郎を待っていた。本当は辻斬りめいた強盗殺人や、新都で起きているガス漏れ事件について調べに行きたかったのだが、士郎達と同居している手前、下手な行動はできない。マードーとの会話も就寝前に一度や二度する程度だ。

聖杯戦争のない生活を謳歌するのもなかなか楽しかった。腑抜けと思われるかも知れないが、三年ぶりの日常というのはいつまでも

楽しみたいものなのだ。

なにせ——あんな、無を視せつけられていたのだから。

開いていた窓から、ヒュウと冷気が吹く。その冷たさは、あの空間に似ていた。

——その風に乗って、鋼が弾かれる音が聞こえた。

「……金属音？」

士郎くんが金属類をハンマーで叩いているのだろうか、だとしてもこんなに大きな音が鳴るはずがない。僕は吸い込まれるように窓に引き寄せられ、身を乗り出して、音のした方角を見た。

視力を強化せずとも解る。

そこには——赤と青の閃光が、火花を散らしていた。

（——サーヴァント！）

マスターの能力で、彼らのステータスを見る。片方は^{アーチャー}弓兵、もう片方は^{ランサー}槍兵。どちらも三騎士の一角とだけあって、かなり高レベルである。僕はマーダーに呼びかけた。

（今すぐ学校へ来てくれ、急いで！）

だが、返答は予想を裏切ったものだった。

（いや、悪いな主人。——厄介なのに見つかってしまった）

彼と感覚を共有する。頭の中に映し出されたのは、真つ黒なローブを羽織った、月のような銀髪の男性とも女性ともとれる人の形をした「ナニカ」。

紛れもなく、サーヴァントだ。

『キャストのサーヴァント、舞月外樹。手合わせ願おう、殺人貴よ』

（そういうことだ、主。命令を）

小さく舌打ちする。二箇所同時にサーヴァント同士の間合いが起きているという、運の悪い事態に。

アーチャーのマスターも、ランサーのマスターも、周囲への被害は考えるはずがない。彼らは徹底的に潰し合うはずだ。それならば、運悪く士郎が遭遇したら最悪のパターンだ。かといって、こちらが下手に見を晒したら愚の骨頂である。

（キャストの力を測って、頃合いと思ったら離脱しろ、いいな）

（はいよ、生きて帰る）

感覚が遮断される。視界が元に戻る。

だがそこには、二つのサーヴァントの影はなかった。先ほどまで戦っていた痕跡——グラウンドのあちこちが大きな爪で抉られたかのようになっている——があるため、あれが白昼夢でないことは分かった。ならば……

（戦闘が終わった？）

おかしい、そんなはずはない。短時間でサーヴァント同士の決着がつくというのは異例である。先ほどの剣戟を見ても、何故か近接戦闘で弓兵と槍兵が互角の戦いをしていた。それならば、もっと長引いてもおかしくはないのである。

だから僕は、最悪の事態を想定するほかなかった。

（士郎がアレに遭遇した——！）

僕は急いで階段に向かう。一刻も早く士郎を探さねばならない。このような形で彼が死ぬことはあってはならないことだと、僕は必死になった。

けれど、すぐ近くでサーヴァントの気配がした。

「——が悪かったな、——」

下から、声が聞こえた。恐らく窓が開いていたのだらう。僕はその幸運に感謝しながら、魔眼殺しの眼鏡をはずすと、廊下の『点』を見つめる。そして、式さんのナイフを抜き——

——だが、聞こえた。

——人体が貫かれる生々しい音が。

「あ、あ——」

まだこの目で確かめていないのに、僕は確信した。この瞬間に、衛宮士郎は死んだ、と。三年とはいえ、体感時間では永遠に等しいような時間も死に向き合っていたんだ。他人より何倍も、死には敏感だ。

彼が死んだ。

日常の象徴とも言える、義弟が。

僕は深呼吸し、思考を整える。士郎が死んでしまったならば、まずはサーヴァントの動向に注意しつつ、彼の『回収』をしなければならぬ。僕は気配を消して、下の階に行った。

直死の魔眼 / ? chapter four

マードーは困惑していた。舞月外樹と名乗ったサーヴァントは、あろうことか腰から短刀を抜き、それで戦いだしたのだから。比較的障害物の多い屋内で戦っているため敵を翻弄しつつ様子見ができるが、開けた土地ならば五分五分、いや、こちらが殺す気でかからなければ勝てはしないだろう。

本来の彼の戦い方は暗殺だ。敵に気づかれるまでもなく、死を与える。

それがどうだ、こちらが気配すら感じ取れず“魔術師”は現れ、あろうことかこちらの土俵で戦って己の手の内を見せていないのだ。

舐められているにもほどがある。そして、路地裏というフィールドでなければ敵の器量すら測れないと認めている自分に彼は苛立ちを隠せない。

「先程から防戦一方だな、……見たところアサシンか、それともイレギュラークラスか。教えてはくれんのかね」

「わざわざ自分の手の内をあかす奴はいないよ」

「ごもつとも。特にこの戦争は情報が勝敗を決める」

言いつつ、キャスターは手を休めない。せわしく動きまわる七夜が近づく瞬間に斬りかかる。その一瞬の隙を彼はいつも見逃さない。そこらの英霊が戦ってきた数の何百倍も、彼は戦場で生きてきたのだから。経験なら、どんな英霊にも負けはしない。彼はそうい

う確信を持っていた。

（本来の私の力ならば、こんなものは戦闘にすらならないのだがな）

運が悪かった、と彼は思った。魔力消費の大きさとマスターは生き絶え、途方に暮れてうろついていたら暗殺者の男と出会い、再契約。町の人間から採取できる極微量の魔力をかき集めて、また霊脈から魔力を汲み上げて何とか顕界している。つまり、魔力を使用する類のものは“今は”使えない。

（問題は中盤だ。序盤は敵の能力を図り、土台を固める。それさえ出来れば何とかなるが、恐らくどこぞのマスターが嗅ぎつけるだろう。そうなれば後は霊脈に頼るしか無い。……効率のいい汲み上げシステムでも考えるべきだろうか）

「考え事か？ 気を抜いたら死ぬぜ、お嬢さん」

「残念だったな、私は男だ。女にもなれるがな」

「……？ 訳のわからないことを言うな」

お互い、渾身の一撃をぶつけ合う。彼らの武器はどちらも折れることなく、使いての技量によって巨大なエネルギーを受け流した。

「閃鞘・八点衝」

「——ッ！」

地面に両足をつけた瞬間、マードーは動いた。彼の手が閃き、一瞬にして八つの斬撃が繰り出される。かろっじで、キャスターはそ

れらをいなした。回避するには早過ぎる速度だったからだ。

自分の攻撃をすべて防御されたマードーは焦った。コレに対処した人間は今までいなかったからだ。しかし彼はすぐに考えを改める。敵は人間ではなくサーヴァント、今までの要領で行ったら勝てるものも勝てないだろう。彼は覚悟を決めて、直死の魔眼を“啓いた”。彼の瞳が蒼く煌き、視界に「死」を写す。

キャスターの死の線と点は無いに等しかった。彼にとってそれだけ死の線が少ないモノは初めてだった。

だが、ないわけではない。

（——絶ち切る！）

八点衝の二倍。十六の斬撃が連続で繰り出される。しかしキャスターはそれを全て弾き——否、彼のローブの先が切れた。だがそれだけ。彼本人にダメージはない。それに、マードーは舌打ちする。焦るなよ、とキャスターは微笑混じりに言った。

「——ッ！」

その一言がマードーに火をつけた。本来暗殺者は常に冷静でなければならぬが、彼は生憎激情家だった。使っていないかった肉^{ぶき}体を使い、キャスターを攻める。

まずは首筋に流れる死の線を狙った一線。それを読んでいたかのように彼はそれを弾く。そこに空いた胴体に左の拳を叩きこむ。キ

ヤスターはそれを左の腕で防ぎ、そこから稲妻のように突きを繰り出す。自分の死の「点」を狙った一撃に、マードーは体を捻り、勢いづいて前進するキャスターとすれ違うように前方に飛び、距離を取る。

「ぜあつ！」

閃鞘・七夜。

マードーは十メートル弱を、たった一足で詰める。端から見れば一瞬姿が消え、キャスターの真後ろに現れたようにしか見えない。サーヴァントとは言え、並を用意に越した速度で彼は動いた。そして、その加速エネルギーを乗せた一撃を、無防備な背中に叩きこむ。

だが、キャスターは真後ろに目があるかのように、前屈みになつてそれを避けた。

「なっ……！？」

マードーもこれには驚きを隠せない。その一瞬の間を見抜いていたように、キャスターはそのまま左手を地面につき、体のバネを使って、マードーの腹部を蹴り飛ばした。

その華奢な足からは信じられないほどの力で、マードーは吹き飛ばされる。彼は吹き飛ばされる際に、腰に刺さっていたナイフを投擲した。そして、勢い良く近場の壁にたたきつけられる。

「成程、特殊スキル……かな？ 私の世界では死神之眼シニガミと呼んでい

たが、その下位互換のようだ」

「私の世界？ シニガミ？ ……何を言っている」

「おや、気が付かなかったのか。君の知る世界には、“舞月外樹という英雄は存在していたのか”？ 『殺人貴』」

「——ッ」

（まさか、オレの正体に気づいている？）

馬鹿な、とマードーは思う。この戦闘の中で、彼の真名に気づく要素はひとつもない。生前知り合いだった人物か、協会の人間でない自分を知るはずがない。

それに彼の知る限り協会の人間に舞月外樹という名前の人間はいないし、おそらく教会にもいないだろう。

そして——舞月外樹なんていう名前の英雄が出る伝説なんて、聞いたことがない。

もしもいたとしても、自分の顔は未来でもそこまで有名ではないはずである。ならば何故、この男は自分の存在に感じているのだろうか。

「そうだ。私は伝説で語られるような存在ではない。まして、一個人として大きな働きをしたわけでもない。私はただ、関わった戦争のすべてを、圧倒的な力で解決してきただけにすぎない。だから、私は舞月外樹なんて名前で呼ばれない」

「——訳がわからない」

訳がわからなかった。何故、敵である自分に己の情報を明かすのか。マードーにはそれが理解できなかった。だからこそ、彼の言葉に耳をかたむけることが無駄であるとすぐに判断した。彼は四肢を地につき、獣のような格好で全身に力を込める。コンクリートの床に喰い込むほどの力を込めて——それは、爆ぜた。

「力を、見せるッ！」

屋根のある、四方を壁で囲まれた空間。上下左右に彼は飛び、キヤスターとのすれ違い様に斬りつける。その速度は、並のサーヴァントでも目視しうる限界を優に越している。しかしキヤスターは、あろうことが目を瞑った。

（こいつ、気でも狂ったか）

何か狙いがあるのかとマードーは疑った。しかし、これほど大きく見せてくれている隙というものもない。彼はキヤスターの心臓付近に小さく存在する点を突くために、ナイフを突き出し、迫る。

そして、キヤスターは、目を閉じたままその攻撃を躲した。そして、あろうことが彼の目前に出た瞬間に、その肋骨に膝を叩き込んだ。まさかカウンターを叩きこまれると思わなかったマードーは、大きく咳き込んでからその事実を認識した。そして、自分の体が浮いたと感じた瞬間に、キヤスターのナイフが己の心臓に、投擲する

ように突き刺さったことを、彼は確信した。

直死の魔眼 / ? chapter five

士郎は、確かに死んでいた。僕は彼の亡骸に歩み寄り、死体の状態を確認する。……まだ温かい、だが、急速にその体温は下がっている。少しだけど呼吸はある。けれど人工呼吸をしても無駄なほどに血は流れている。失血死は免れない。

苦しませながら殺すのが彼のためか、それとも、奇跡が起きて生き返るのを待つか。僕は選ばなければならなかった。

「……召喚する前に、殺されるとはね」

彼の右手の甲をみて、そう思う。そこには、マスターの証である
ステイグマ聖痕があった。

昨日の時点で、彼にマスターとなる聖痕があるのは確認していた。彼は聖杯戦争を知らない風だったから召喚は偶然が起きないと仕方ないものの、聖杯に選ばれたのなら絶対に召喚をする運命にあったはずだ。

（因果逆転の宝具でも使われた、か？）

一般人に対して宝具を使うとは思えないが、それが付加されたものならば運命を歪ませることすら可能であろう。もしくは、“これすらも運命の一つなのか”。

「……解らないな」

解らない。

ワカラナイ。

途端、疾風の如き速度で僕の隣を赤色の騎士が駆けていった。恐らく、士郎を殺した槍兵と戦っていた弓兵だろう。僕に一瞥をくれた気がするが、返すまもなく行ってしまった。

独り、僕が士郎の亡骸と残される。

「――」

――その時、誰も居ないはずの廊下で革靴の音がした。

「――」

僕は振り向き様に、制服の袖口からナイフを抜き、いつでも音源に向かって疾走できるように身構える。

――うそ、と言わんばかりに目を見開いて士郎を見る、誰かがいた。

僕は、“それ”の顔を視認する前に飛び出した。相手がマスターならば、こちらの顔を見られる訳にはいかない。

——最初に見えたのは、この学校の上履きと、黒いニーソックス。

それを見た瞬間に、まさか生徒がマスターだったとは思った。けれど、敵であることには変わらない。殺す相手であることには変わらない。僕は歩みを止めず、もう一足踏み込む。

——次に見えたのは、二つ結びにされた黒髪。そして、見覚えのある顔。

その瞬間に、踵でブレーキをかける。僕の知りうる限り、知り合いにただ一人、こんな顔の女の子はいる。僕のお見舞いに毎日来てくれていた、学校のマドンナとも言える存在。

——けれど、勢いは止まらない。幼い頃から鍛えられてきた反射で、腕が勝手に動く。

驚きで目を見開いている少女——遠坂凜が、そこにいた。

——彼女の頸動脈を断ち切るために、僕の腕が、迫る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6508y/>

Fate/ stay with murder

2011年11月29日20時57分発行